

第15回宝塚混声合唱団音楽会

2003年8月2日(土)

開演：6:00

いたみホール

(伊丹市立文化会館)



主催：宝塚混声合唱団

後援：

宝塚市・宝塚市教育委員会

宝塚市文化振興財団・宝塚合唱連盟

ごあいさつ

連日の暑さが続く中、宝塚混声合唱団音楽会にお運びいただき誠に有り難うございます。今回は第15回の節目を記念してドヴォルザークの大曲「スタバト・マーテル（悲しみに沈む聖母）」を演奏させていただきます。

私たちは1999年春に初の海外演奏旅行でドイツ（ライプツィヒ、ドレスデン）及びチェコ（プラハ）を訪ね、バッハゆかりの聖トーマス教会でオルガン演奏を聞き、ドヴォルザークの音楽を熱烈に愛するプラハ市民の心意気を目の当たりにしました。旅の途中、私たちもドヴォルザークを歌いたいという思いがつのり、それが今回の音楽会へとつながって参りました。

音楽会を企画してから今日に至るまで、団員の増強・発声の基礎訓練・強化合宿などを重ね、1年をかけて宝混らしい音づくりに挑戦してきましたので、今日は熟成した音楽をお楽しみいただけるものと思います。この間に拉致問題が発覚し、イラク戦争が起こるなど、尊い生命が危険にさらされている現実を知らされましたが、私たちには、暖かい血の通った、人間味豊かな名曲を味わう喜びがありました。この幸せを大切にして、音楽を通して世界の平和を願うものでございます。

最後までごゆっくりご鑑賞いただき、宝塚混声合唱団の活動にご理解とご支援をたまわりますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

平成15年8月 宝塚混声合唱団



（表紙写真：プラハのビート大聖堂 T 宇野 健一）

プログラム

1. AGNUS DEI

SAMUEL BARBER

オルガン

原田 仁子

2. STABAT MATER

ANTONÍN DVOŘÁK

I · II · III · IV

— 休憩 —

V · VI · VII · VIII · IX · X

ソプラノ

津山 和代

アルト

野間 直子

テナー

畑 儀文

バス

井原 秀人

オーケストラ

大阪シンフォニカー交響楽団

協力

アンド企画

指揮

大森 地塩

曲目解説・歌詞・訳

1. AGNUS DEI

SAMUEL BARBER

アニュス・デイ 「神の子羊」

サミュエル・バーバー (1910-1981)

混声合唱に編曲された「弦楽のためのアダージオ 作品 11」

近代アメリカの作曲家バーバーは若くして交響曲、弦楽四重奏曲その他でヨーロッパでも高い評価を得た。「弦楽のためのアダージオ」(1937年)はこうした出世作の一部で、巨匠トスカニーニにより初演されている。昭和60年過ぎ、それはベトナム戦争の映画「プラトーン」の音楽となり、合唱曲(1967年編曲)は全日本合唱コンクールでも歌われた。深い美しさを湛えた曲である。

歌詞はミサ曲終曲のラテン語の祈りで、「神の子羊」はキリストを指す。

ppから次第に高揚する痛切な祈りはff・9声の壮麗なクライマックスとなり、安らぎや慰めも伝わってくる中、アルトのリードする Dona nobis pacem. で静かに終わる。

(解説・訳：B 長尾 精)

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,
miserere nobis
Dona nobis pacem.

世の罪を取り除く神の子羊
私たちを憐れんでください
私たちに平安を与えてください

2. STABAT MATER

ANTONÍN DVOŘÁK

スタバト・マーテル 作品 58

アントニン・ドヴォルザーク (1841-1904)

チェコ国民音楽の父といわれるドヴォルザークは、1841年にボヘミア(現チェコ)のネラホゼヴェス村で肉屋と居酒屋の家の息子として生まれた。ドヴォルザークは、楽曲のすべての分野にわたって200以上の作品を残しているが、特に交響曲、室内楽、声楽曲に優れた作品が集まっている。

「スタバト・マーテル」とは、ラテン語で「悲しみに沈む聖母」の意味。1876～77年にかけて、彼が36歳の時に作曲された。古今の「スタバト・マーテル」の中でも、特に温かい血の通った人間味豊かな名作といわれている。

この名作を鑑賞する際に、作品の背景として、次の3点は是非知っておきたい。

<幸福の絶頂から悲劇のどん底へ>

この作品からは、ドヴォルザークの個人的な強い思い入れが内面から滲み出てくる。家業を継ぐことを期待していた父親の意志に逆らって音楽家を志し、少年時代から苦労を重ねてきたなかで、ようやく

く幸運をつかみかけた30代の半ばに、彼の家庭を不幸な出来事が相次いで襲った。生後まもない長女の死に次いで、1年後に11ヶ月の次女が誤ってリンの入った毒物を飲んで死に、その3週間後に3歳半の長男が天然痘にかかって亡くなった。結婚、政府奨学金獲得、ブラームスとの出会いといった幸運が微笑みかけた後に起こった極限の悲劇が、作曲のエネルギーとなったといえる。

<信仰心>

この作品は、近代チェコ最初の大規模な教会音楽である。チェコは中欧の中でも無神論者の多い国として知られており、スメタナがオラトリオ、ミサ、カンタータの類に手をつけなかったのも、このこととは無関係ではない。一方で、ドヴォルザークは敬虔なカトリック教徒で、ミサの礼拝にはほとんど欠かさず列席したともいわれる。家庭内での悲劇に直面した彼は、宗教に救いを求めつつ作曲を進めた。この作品のテキストに関して、専門家の中には彼のラテン語の知識不足を指摘する人もいるが、彼の曲に込めた信仰心や曲の魅力の妨げにはなっていない。

<チェコ人として生きる>

ドヴォルザークが生きた時代のチェコは、ハプスブルク帝国の版図にあった。同帝国は、ドイツ人(人口の約25%)、ハンガリー人(人口の約20%)の他、チェコ人、スロヴァキア人、クロアチア人、ユダヤ人など10以上の民族からなる複合民族国家であった。この作品が誕生したころは、同帝国内第2勢力のハンガリーに自治権を与え、オーストリア＝ハンガリー二重帝国が成立していたが、第3勢力であったチェコは、ハンガリー人同様の自立(三重帝国)を強く求めていたにもかかわらず、願いがかなわなかった。そのような状況下で、彼は横柄でチェコ人嫌い(?)に見えた帝都ウィーンへの移住の誘いを断り、チェコ人として故郷で作曲活動を続けた。彼は、晩年にアメリカに渡ったが、望郷の念は捨てられず、予定より早く故郷に戻っている。彼が確立したともいえるチェコの合唱音楽は、ヤナーチェク、マルティヌーらに確実に引き継がれた。

この作品は、合唱、独唱、管弦楽による次の10曲で構成される。詩は13世紀イタリアのフランシスコ派修道士、ヤコポーネ・ダ・トーディの作とされる。(但し、近年は否定される傾向も強い。)

- | | |
|--------------------|--------------------------|
| 〔第1曲〕 四重唱と合唱 | “悲しみに沈む御母は立っておられた” |
| 〔第2曲〕 四重唱 | “涙を流さない者があろうか” |
| 〔第3曲〕 合唱 | “さあ 御母よ” |
| 〔第4曲〕 バス独唱と合唱 | “私の心が燃えるようにして下さい” |
| 〔第5曲〕 合唱 | “傷つけられたあなたの御子の苦痛を分けて下さい” |
| 〔第6曲〕 テナー独唱と合唱 | “私に真に苦しみを感じさせて下さい” |
| 〔第7曲〕 合唱 | “処女の中の聖母よ 共に嘆かせて下さい” |
| 〔第8曲〕 ソプラノ・テナーの二重唱 | “キリストの死を負わせて下さい” |
| 〔第9曲〕 アルト独唱 | “火をつけられる私を守って下さい” |
| 〔第10曲〕 四重唱と合唱 | “肉体は死んでも” |

初演は1880年12月23日プラハにて、アドルフ・チェフの指揮で行われた。(チェフは2年後に、スメタナの「わが祖国」全曲を初演。)その後、1884年のロンドンのロイヤル・アルバート・ホールでの作曲者指揮による演奏で、彼の国際的な名声は一気に高まったとされる。日本では、戦後の合唱運動のなかで、この作品が取り上げられ、とりわけ第3曲が広く歌われた。

(解説：B 大隅 仁・訳：B 長尾 精)

I . Stabat Mater dolorosa

「悲しみに沈む御母は立っておられた」(四重唱と合唱)

Stabat Mater dolorosa juxta crucem lacrimosa,
dum pendeat Filius.

Cujus animam gementem, contristatam et dolentem,
pertransiuit gladius.

O quam tristis et afflicta fuit illa benedicta
Mater Unigeniti !

Quae maerebat et dolebat, pia Mater, et tremebat,
dum videbat Nati poenas incliti.

悲しみに沈む御母は立っておられた 十字架のそばで
涙を流して 御子がかかっていたおられた時に
嘆き憂い悲しむその心は刃でつらめかれた

ああ 主の独り子のあの祝福された御母はどれほど
悲しみ悩まれたことか
栄光の御子の苦しみを見て慈しみ深い御母は
悲しみ苦しみを震えておられた

II . Quis est homo

「涙を流さない者があろうか」(四重唱)

Quis est homo, qui non fleret, Matrem Christi
si videret in tanto supplicio ?

Quis non posset contristari, Christi Matrem
contemplari dolentem cum Filio ?

Pro peccatis suae gentis vidit Jesum in tormentis
et flagellis subditum.

Vidit suum dulcem Natum moriendo desolatum,
dum emisit spiritum.

キリストの御母がこれだけ嘆き祈られるのを見て
涙を流さない者があろうか

キリストの御母が御子と共に苦しまれるのを見て
誰が悲しまないでおられようか

御母はイエスが自分の民の罪によって責められ
むち打たれるのをご覧になった

御母は愛する御子が死に瀕して見捨てられ
息絶えるのをご覧になった

III . Eja, Mater

「さあ 御母よ」(合唱)

Eja, Mater, fons amoris, me sentire vim doloris
fac, ut tecum lugeam.

さあ 慈しみの泉である御母よ 私に悲しみのほどを
感じさせ貴方と共に嘆かせて下さい

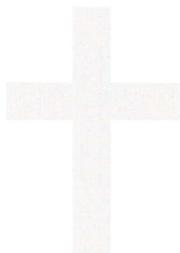
IV . Fac, ut ardeat

「私の心が燃えるようにして下さい」(バス独唱と合唱)

Fac, ut ardeat cor meum in amando Christum
Deum, ut sibi complaceam.

Sancta Mater, istud agas, Crucifixi fige
plagas, cordi meo valide !

私の心が神キリストを愛して燃え
御心にかなうようにして下さい
聖母よ どうか十字架にかかった方の傷を
私の心に深く刻みつけて下さい



V . Tui Nati vulnerati

「傷つけられたあなたの御子の苦痛を分けて下さい」(合唱)

Tui Nati vulnerati, tam dignati, pro me pati,
poenas mecum divide.

私のためにこのように傷つけられ苦しめられた
あなたの御子の苦痛を私に分けて下さい

VI . Fac me vere

「私に真に苦しみを感じさせて下さい」(テナー独唱と合唱)

Fac me vere tecum flere, Crucifixo condolere,
donec ego vixero.
Juxta crucem tecum stare, te libenter sociare
in planctu desidero.

命の限り真に貴方と涙を流し十字架にかかった方の
苦しみを感じさせて下さい
私は十字架のそばに貴方と立って進んで貴方と
嘆きを共にすることを望みます

VII . Virgo virginum

「処女の中の聖母よ 共に嘆かせて下さい」(合唱)

Virgo virginum plaeculara, mihi jam non sis
amara, fac me tecum plangere.

処女の中の輝く聖母よ 私を退けないで
共に嘆かせて下さい

VIII . Fac, ut portem

「キリストの死を負わせて下さい」(ソプラノ・テナーの二重唱)

Fac, ut portem Christi mortem, passionis fac
consortem et plagas recolare.
Fac me plagis vulnerari, Cruce hac inebriari,
ob amorem Filii.

私にキリストの死を負わせその苦難を共にし
その傷を偲ばせて下さい
御子の傷で私を傷つけたこの十字架と御子の愛で
酔わせて下さい

IX . Inflammatus et accensus

「火をつけられる私を守って下さい」(アルト独唱)

Inflammatus et accensus, per te, Virgo, sim defensus,
in die judicii.
Fac me cruce custodiri, morte Christi praemuniri,
confoveri gratia.

聖母よ 審判の日に火をつけられる私を
貴方の手で守って下さい
私を十字架によって見守りキリストの死によって
かばい恵みによって慈しんで下さい

X . Quando corpus morietur

「肉体は死んでも」(四重唱と合唱)

Quando corpus morietur, fac, ut animae donetur
paradisi gloria. Amen.

肉体は死んでも 霊魂には天国の栄光が
与えられますように アーメン (確かに)

宝塚混声合唱団の歩み

1978年12月に開催された第1回宝塚市民合唱祭に集まった宝塚合唱連盟傘下の合唱団を母体として大合唱団創設の機運が高まり、翌年の第2回宝塚市民音楽祭の「燃える第九」を転機に組織化が進み、1980年2月17日に宝塚混声合唱団が誕生した。その後、1994年の第17回市民音楽祭まで音楽祭の中心的な合唱団として国内の第一線指揮者と関西の主要交響楽団を招いて大曲の演奏に取り組んできた。創設時の指揮者は小池義郎氏。これと並行して独自の取り組みも進め、1985年4月に創立5周年を記念して第1回リサイタルを開催した。1989年には大森地塩氏を指揮者に迎え、1991年以降、自主企画による音楽会を定期的で開催するようになった。

年	演奏会他	曲目他
85	第1回リサイタル (創立5周年記念)	「ミサ ト長調」(シューベルト作曲)
87	第2回リサイタル (ジョイフルコンサート)	邦人作家の代表的組曲より
90	第3回リサイタル (創立10周年記念) 小林研一郎指揮	「レクイエム」(フォーレ作曲) 「水のいのち」(高田三郎作曲)
91	第4回リサイタル	「カンタータ 106 番」(バッハ作曲) 「望月の駒」(三木稔作曲)
93	第5回リサイタル 小諸市へ演奏旅行	「ミサ・ブレヴィス」(コダーイ作曲) 「ロシア合唱曲集」 「つつじの乙女」(三木稔作曲)
94	第6回リサイタル (小諸ハーモニーを迎えて)	「六つの格言」(メンデルスゾーン作曲) 「回転木馬」(大中恩作曲)
95	第7回リサイタル (創立15周年記念) 大阪シンフォニカー特別演奏会 “秋” トーマス・ザンデルリンク指揮	「小荘殿ミサ」(ロッシーニ作曲) 「レクイエム」(フォーレ作曲)
96	第8回リサイタル	「詩編第42」(メンデルスゾーン作曲) 「ロジェ・ワーグナー合唱曲集より」 「レクイエム」(三木稔作曲)
97	第9回音楽会 大阪シンフォニカー特別演奏会 “秋” トーマス・ザンデルリンク指揮	「ドイツ・レクイエム」(ブラームス作曲) 「ドイツ・レクイエム」(ブラームス作曲)
98	第10回音楽会	「口短調ミサ」(バッハ作曲)
99	第11回音楽会 ドイツ演奏旅行 (ライブツィヒ・カーメンツ) ドヴォルザーク室内オーケストラ マリオ・コシック指揮	黒人霊歌集・日本民謡集・「テ・デウム」(メンデルスゾーン作曲) 「ミサ第2番ト短調」(シューベルト作曲)
00	第12回音楽会 大阪シンフォニカー演奏会 トーマス・ザンデルリンク指揮	「愛の歌」(ブラームス作曲) 「島よ」(大中恩作曲) 「マドリガル集」(モンテヴェルディ作曲) 「カルミナ・ブラーナ」(カール・オルフ作曲)
01	第13回音楽会	「十字架への道」(リスト作曲) 「マドリガル集」(モンテヴェルディ作曲) 「木と鳥のエピグラム」(木村嘉長作詞・別宮貞雄作曲) 「新・愛の歌」(ブラームス作曲)
02	第14回音楽会	「モテット集」(バッハ・ブラームス・ブルックナー作曲) 「方舟」(大岡信作詞・木下牧子作曲) 「聖人の盛儀の晩の祈り」(モーツァルト作曲)